

市長と副市長、教育長は、ほぼ毎日、朝一番に集まり、意見交換を行っています。平成27年5月27日に集まった際の内容です。

人は誰もが、かけがえのない大切な存在

先日、小6の孫の算数の宿題を見ました。分数の問題でしたが、とても難しいのに驚きました。

私は、日本中の子どもたちが、こんな難しい問題に取り組んでいることに驚き、「私たち大人は、日本中の子どもを、どこに向かわせようとしているのか？」と考えてしまいました。

これまで、親も先生も、地域の人も、「子どもたちをどこに向かわせたいのか？」について考える機会、考える場がありませんでした。でも、今、じっくり考え、みんなで共有することが、必要ではないでしょうか。



戦後の日本は、みんなが山の頂上に向かって、早く、効率的に進むことが目標でした。その時代、人を比べるモノサシは1つでも良かったのかもしれませんが。

人口減少という、誰も経験をしたことがない時代を迎えた今、山の頂上から360度に広がる麓のどこに向かうのが正解なのか、誰もわかりません。正解はないのかもしれませんが。そんな時代、モノサシは1つだけでは足りない気がします。

私は、「生まれてきた命は、みんなが大切な存在なんだ」「人は誰もが、かけがえのない存在なんだ」と思っています。

「みんなが大切な存在」とは、多様な人を認めていくということです。多様な人を認めるということは、一人ひとりが、それぞれ違うモノサシを持つことなのです。いろいろなモノサシがあれば、いろいろな価値観があり、誰もが生きていくのが少しずつ楽になるはずです。

以前、こんな話を聞いたことがあります。

算数の時間、子ども達に「1と2、どちらが大きい？」と尋ねたところ、「2」と答える子が多い中、「1の方が大きい」と答えた子がいたそうです。クッキーの大きさで考えたら、1個を半分にした「2」より、「1」の方が大きいというのが、その子の答えでした。

算数の授業を効率的に進めようとしたとき、「1」と答える子は、面倒な存在かもしれません。戦後の日本は、学校でも会社でも、介護の世界でも、効率性を重視して、単純化し、思考能力が少なくても前に進むような仕組みを作り上げてきました。こうした効率性を重視した仕組みは、戦後の日本が、大きく成長するためには必要でした。しかし、戦後70年経った今も、同じ仕組みのままです。

教育や生活の場には、完成がありません。一生懸命に完成を目指しても、時代によって目指すべき完成の形は変わっていくものなのです。

今、読んでいる本の中で、脳科学者が次のように書いています。

「記憶力を高めると、想像力が減る」

このことは、脳科学者の中では、広く知られていることだそうです。

これまでの日本の教育は、どちらかと言えば、ひたすら記憶させるものでした。そうした教育は、もしかすると、子ども達の発想力、想像力を奪うものだったのかもしれない。

2045年には、人工知能が人間の能力を超えと言われています。何でもパソコンで調べることができ、人間は何も記憶する必要がない社会になるかもしれません。そんな社会を迎えるときに、「人間が存在する意義は、何なのか？」をみんなで考え、共有したいのです。

～市長の話聞いて～

昔、小学生の甥の算数の宿題が難しくて教えられず、「d l（デシリットル）なんて、大人になってから、一度も聞いたことがない!」と逆ギレした記憶があります。

「社会に出たら、学歴は関係ない」とよく耳にしますし、私自身、そう思います。でも、どうして子ども達には、「中間テスト、どうだった?」「高校はどうするの?」などと勉強のことばかり、聞いてしまうのでしょうか。

市長は、「例えば、社会科の授業は、古代の歴史から始めるのではなく、自分が住む長久手の地名や地形、方言から勉強してはどうか?」とおっしゃいます。そうすると、異動してきた先生は教えられないので、地域の高齢者などが先生役になります。地域の人が、学校に関わる一つのきっかけになります。こうして、親だけでなく、いろいろな背景を持つ人が、学校や地域、教育の場に関わっていくことが、これからは必要なかもしれないと思います。